ビオトープの四季（No. 26）　湘南ひらつかキャンパス　2013/12/10

＜遠近法＞何時もの場所*から富士山に向かって100mほど近寄って撮った写真です。SHC は富士山から東に約 50km の所に在りますからこの100mは無視できるほどのものです。しかし左のタブノキやビオトープのクヌギやナラ（正面の色づいている木々）には半分ほど近づいたことになります。手前の木々に比べて富士山が小さく見えますね。浮世絵の思い切った表現とはいえ「富嶽三十六景神奈川沖浪裏」（葛飾北斎）の小さな富士の見え方が分かるような気がします。＊10 号館への渡り廊下

＜立つ鳥跡を---＞一方ビオトープではガマはすっかり枯れ草となり水草がほんの少し残る初冬の池の姿となりました。風で波立つほどの大きさではない池が最近はしばしば濁って波立っています。カップルで来ている鴨が不用意に近づく人の気配を感じて急いで飛び立つたった直後です。池が浅いため底の泥をかき回し“跡を濁さず”とはいかないのですね。それにしても用心深い!!泳いでいるところを撮りたいのですがなかなかカメラに収まりません。

＜平均寿命＞12 月に入っても晴天の日だまりにはまだミヤマアカネの姿が見られます。さすがに産卵している様子はないのですが寒い夜はどうしているのかと思うくらい頑張っています。ちなみにテントウムシは建物などの日当たりの良い側に沢山集まり身を寄せ合っているのを見ることがあります。というわけで簡単に調べてみました。トンボは災難に遭わなければ羽化してからも成熟し 3 カ月ほど生きるようです。ただ鳥などの餌食（えじき）になるため平均寿命はぐっと短くなるでしょう。写真のトンボは幸運に恵まれたのでしょうか。ただこの種類は冬を越せないので寒い季節に生きている姿を見て手放しで“おめでとう”、”幸運を!“とも言えません。

＜デルタ翼＞つい最近まで見られたシジミチョウが姿を消しました。代わりに日当たりの良い処でひらひらと舞っては枯れ草の間に姿を消す小さな生き物を見つけました。枯れ草色の蛾です。今の季節でなければ気にも掛けなかったような地味さですが、今は“生きている!”を感じます。（今号は敢て写真の説明なしにしました）

（文と写真：松本正勝）